

「国民国家」を生んだ フランス革命



18世紀末

18世紀末のフランスでは、流血をともしなう革命によって古い体制が打ち破られ、「国民国家」が生まれた。

フランス革命の経過と、革命時のフランス

財政危機 三部会招集 1789年5月

宮廷の浪費/対外戦争

↓ 1789年6月

食糧危機

国民議会結成 第三身分(平民)の議員が憲法制定を掲げて結成
球戯場(テニスコート)の誓い

↓ 1789年7月14日

バスティーユ牢獄の襲撃 パリ民衆による蜂起

フランス革命の勃発

社会階層ごとの利害を背景にした党派間の対立が、革命に混乱と流血をもたらす。

人権宣言採択 人間の自由と平等、国民主権などを謳う

1791年憲法制定 一院制の立憲君主政。有産市民に選挙権

立法議会成立 共和政を主張するジロンド派が台頭

1792年 王政回復を狙うオーストリア・プロイセンに宣戦。

民主主義革命に危機感をもった周辺の君主国は、革命に対し結束して干渉を加えた。

第1回対仏大同盟 1793~97年
イギリス主導。各国と同盟して干渉。

第2回対仏大同盟 1799~1802年
イギリス、ロシア、オーストリアなどの同盟。

1792年9月

第一共和政 国民公会による政治

王政の廃止、共和政の樹立を宣言。

内外の危機が続くなかで、急進派・強硬派が主導権を握る。

ジャコバン派の独裁と恐怖政治

ルイ16世と王妃マリー=アントワネットを処刑。ロベスピエールを中心に急進的政策を推進。公安委員会による反対派の処刑。

フランス革命時のおもな党派

王党派 第一・第二身分の聖職者・貴族を中心とした党派。絶対王政支持の立場

第三身分が母体

フイヤン派 自由主義の貴族と富裕な市民が中心。立憲王政の立場

ジロンド派 中産市民・富農などが中心、比較的富裕な層(ブルジョワジー)。共和政の立場

ジャコバン派 無産市民・小作農などを基盤にした党派。急進的共和政の立場



フランス革命政府は対外戦争に追われる

テルミドールの反動(クーデタ)

恐怖政治への反動。ロベスピエール処刑。

1795年10月

総裁政府 5人の総裁からなる政府

穏健共和派が中心。

権力分散により政治は安定せず、強力な指導者を望む気運高まる。

ナポレオンの台頭

王党派の反乱鎮圧、イタリアやエジプトへの遠征で戦功をあげる。
▷p.102

ブリュメール18日のクーデタ

ナポレオンが、権威失墜した総裁政府を倒す。

1799年12月26日

ナポレオンの統領政府 樹立

フランス革命の終結

旧制度を打破する革命勃発。王政から共和政へ
アンシャン・レージュム(旧制度)下のフランスでは、社会は封建的特権をもつ聖職者や貴族と、参政権がなく課税の義務を負う農民や市民に二分されていた。国王ルイ16世は、宮廷の浪費や対外戦争で悪化した財政を特権階級への課税で改善しようとしたが、これに貴族が反発。事態打開のため、1789年に175年間招集されていなかった三部会(P77参照)を開催した。しかし、議決方法をめぐって紛糾し、第三身分(平民)が独自に国民議会

恐怖政治をへて、英雄ナポレオンが登場

93年、第1回対仏大同盟が結成されて対外危機が高まるなか、国民公会で主導権を握った急進的なジャコバン派は、ロベスピエールの指導の下、反対派の人間を次々に断頭台に送り、処刑する(恐怖政治)。しかし、翌年には穏健共和派によるテルミドールの反動(クーデタ)が発生し、ロベスピエールは処刑され、95年には穏健な共和派ブルジョワジーによって、5人の総裁による総裁政府が成立した。この不安定な政局のなか、革命軍の将校として功績をあげていたナポレオンが国民の支持を得、99年のクーデタで政権を掌握する。

フランス革命は、自由・平等の理念に加えて、個人を「国民」として国家に結びつける国民国家の原則を打ち出した。

人権宣言

フランス革命初期の1789年8月26日、国民議会で採択された宣言。正式名称は「人間および市民の権利宣言」。前文と本文17条からなり、すべての人間の自由と平等、永久に侵すことのできない権利としての自由・所有・安全・圧政への反抗権、国民主権などを保障する。アメリカ独立宣言と並び近代人権宣言の模範とされ、多くの影響を与えた。

Key Word